

その他

本学における英語教育の取り組み ーグローバル社会に生きる学生のためにー

English Education Efforts in Kansai University of Nursing and Health Sciences:
For the Students Living in a Global Society

西垣有夏

関西看護医療大学 看護学部 専門基礎

Yuka Nishigaki

Kansai University of Nursing and Health Sciences. Faculty of Nursing. General Education

I はじめに

筆者は2021年に本学の英語担当の専任講師として着任したが、本学学生の英語に対する関心はとても強いと感じる。授業開始時に既習単語を板書すると、休み時間気分で談笑していた学生はすぐに授業体勢に入り、その意味を確認すべくノートやテキストを開く。また、学生は音読にも積極的に、重要単語や発音困難な単語を何度も繰り返し発音練習している。今やグローバル化が加速しており、国境を越えた文化や情報の往来に国家単位の認識では太刀打ちできない。そうなるとグローバル社会における競争力や生存力の可能性の多くは、その開放性を形成する人材のグローバル化に対応した能力の有無にあると言える。言うまでもなく医療現場も例外ではない。グローバル社会に向けて本学学生は英語の必要性を感じているのか、グローバル社会に関係なくただ単に卒業のための単位取得しただけなのか、思いは様々かもしれないが英語の取り組みに熱心なのは確かだ。

だが、本学学生の英語に対する苦手意識はとても強い。本学着任以来、「英語は必要だと思うけど、(習得は)あきらめている」という声を学生から幾度となく聞かされている。筆者が本学学生に入学前に英語を嫌いに、あるいは苦手になった理由を聞いてみると、文法用語ばかり用いた説明だったこと、授業時間毎の英単語のテストに辟易したという回答が多かった。確かに文法や単語は英語力向上において重要だが、それらを重点的に授業で取り入れたところで学生が英語学習に積極的に

取り組むとは言い難い。文法用語ばかりでは授業が退屈なものとなりかねず、単語テストのための単語暗記は学習者にとって苦痛なものとなるかもしれない。教員側が英語力向上を口実に授業運営上学生に対する配慮がなければ、どんなに教員側に教える技術があり、良質な教材を利用しても、学生としては英語学習も魅力を感じなくなるだろう。つまり、中学・高校であれば、生徒は進学に向けて成績や偏差値を上げるための手段として英語に取り組むのであって、英語そのものを身に着けたいという興味は薄れてしまう。とりわけ大学入学試験で英語が必須科目でなければ、英語に対して苦手意識を抱えたまま大学に入学することになるだろう。

しかし、グローバル化が進む現代社会において英語が要求される機会が多くなることは確かだ。英語が苦手な学生に対して基礎から学習できるようにし、さらに学生が積極的に学べるための授業運営の創意工夫が必要となる。本学において筆者がとった英語の授業運営、授業時間外の学習、さらに学生への配慮やサポートについて述べていくことにする。

II 本学における授業運営の工夫

先にも述べたが、本学では英語に対する苦手意識を持つ学生が多い。中学高校の6年間英語に取り組んだにもかかわらず理解できなかった挫折感を抱きながら学生は英語の授業を受けることになる。しかし、看護学を学ぶ学生は国家試験突破後

看護師という専門職に就く以上、医療関連の文書を英語で読む機会があることを想定しなくてはならない。わからない単語があれば辞書で調べながらも、将来的には正しく英文を解釈できるようにしておく必要がある。

筆者が本学の英語の授業で力を入れるのは英語の基本習得と英文構造把握である。本学学生にどのようにして説明したのか、本学で利用しているテキストの英文を挙げて述べていく。

The number of women with menstrual problems is increasing. (Sasajima & Yamazaki, 2017, 21).

まず学生にこの英文をピリオドまで一文すべて音読してもらう。もし一文が長ければ複数の学生に当ててコンマなどのある英文の区切りのあるところで切って、交代で音読させる。英文の全体像を見た上で英文構造、つまり主語や動詞といった文章の骨組みを学生に考えてもらう。単語の意味も分からないのにいきなり音読と文章構造の把握は荒療治に見えるかもしれないが、正しく文脈をとらえるには英文全体を見ておく必要がある。さらに、和訳なしでいずれ英文を読むことも想定し、日本語表記に頼らないで英文に向き合う姿勢を身に着けておく必要があるので敢えてこのような手段を取っている。この英文では、主語は The number で、動詞が is increasing となる。

まず、文章の骨格となる主語と動詞の単語から説明する。ここでは主語の number は「数」、動詞となる is increasing は、increasing は原形が increase「増える」であることを説明し、be 動詞＋～ing 形の進行形であると説明する。この時点では「進行形」というだけで文法説明に深入りしないようにする。そして主語と動詞で合わせて、「数が増えている」という英文の骨格が完成する。The number of women で「女性の数」、with menstrual problems で「生理の問題を抱える」となり、あとはすでに説明した動詞部分 is increasing だけとなる。文章構造把握後は丁寧に和訳をするのではなく、英文を文頭から解釈していくようにする。英文内容の理解はできて学生が安心したところで、ここで取り上げた文法、つまり進行形に注目する。すでに今までの説明で学生が文法を理解できていることがあるので、そうな

れば教員側は文法説明を具体的にする必要はない。もし、学生の進行形の理解が不十分であれば、You are studying English.「あなた方は勉強をしている」という授業中ならではの身近な状況を例文にして説明する。

英単語の暗記、つまり語彙力増強は後回しで良い。「英語力は単語力」という言葉を幾度となく聞かされ、単語テストを授業毎に強いられた学習者から見れば意外かもしれない。しかし、英文を正確に読み取るためには、単語量よりも英文構造の把握を優先する。正しく構文把握できない状態で単語量増強に力を入れても英語力は伸び悩み、英文に大量に読んで学習時間をかける割に効果がない。それに英文を読む際には英和辞書を用意して未知の単語や熟語を調べれば済むことだ。だが、英文構造の把握については教育機関での教員の指導の下で訓練しておく必要がある。英語力向上にはまず英文把握力である。

授業では切りのいいところで質問がないか学生に聞き、授業進行に少し間を置くようにしている。この時間を教員としては学生からの質問時間に充てているが、学生から質問がなければ、その日に習った内容を最初から見返すための時間として学生に利用してもらえばいい。学生が教員の説明を聞くのに集中して、それまでに習ったことに目を向ける余裕がない可能性を考えておく必要がある。

Ⅲ 授業時間外学習と学生へのサポート

英語は授業を受ければそれですぐに身につくわけではない。授業で習ったことを定着させるには授業後の復習が肝心だ。学生が英語に対して前向きに取り組んでいけるように授業時間外にも学習ができる工夫が必要である。

授業時間外の学習として、授業で行った内容に関する設問をプリントで配布し、次回授業時まで仕上げて提出する方法をとっている。プリント内容は主に授業で取り組んだ英文を利用した単語問題だが、解答に際しては英文の全体像を見て、主語動詞といった構文把握して、文法を理解するという過程を経る。授業内容の復習になり、英語に向き合う時間を増やす機会も持つことで英文を正しく読むことができるだけでなく、必然的に単語量を増やすことができるといった相乗効果があ

る。

課題プリントにはただ丸を付けて採点するだけでなく、必ずコメントを付けて返却するようにする。コメントについては、間違ったところの注意点を書きながらもなるべく学生が前向きに取り組んでいけるような内容にする。採点だけにすると、学生にとっては返却されたプリントを見て「だめだった」「よくできた」とその場しのぎになってしまい、プリントを見返して復習する意欲が失せるかもしれない。毎回コメントを書けば何を書かれたのか興味を持つことになり、プリントに目を向け、英語学習に向き合うきっかけとなりうる。学生がプリントを期限までに仕上げて提出するということは、プリントに取り組む時間を捻出して計画的に勉強することにつながる。このようなごく当たり前のことでも疎かにせず、しっかりとこなす学生の姿勢を時には褒めることも教育者として忘れてはならない。

また、授業内容が理解できたとしても、どのようにして英語の勉強をすればいいのかわからずに途方に暮れている学生が多い。手順は授業と同じで英文の全体を見て主語動詞といった文章構造把握、それから丁寧に和訳する必要はないので英文を前からとらえるようにして内容を解釈していけばいいと伝えている。英語はまとまった時間で長時間勉強するよりも、短時間毎日勉強するほうが効果的である。そこで、バスを待つ間などのほんのわずかの隙間時間を活用して反復学習を心がけて英語に取り組むように学生にアドバイスしている。定期試験直前期となると、看護専門科目の勉強、レポート作成と並行して授業も受けるという毎日を学生は過ごすのだから、英語学習に割ける時間は少なくなる。英語に限ったことではないが、早めに少しずつ取り組み、テスト前になってから慌てることなく、時間と心のゆとりをもって準備を始めるように学生に伝える。

さらに、学生が教員に質問しやすい雰囲気を作るようにしている。教員が連続して授業がないときには、授業終了してから少し長めに教室に残るように心がけている。授業中だと周囲の学生の目が気になって質問しにくい雰囲気があるが、授業が終わった後なら他の学生の視線を気にせず、学生は教員に質問しやすくなるだろう。授業や移動時間の都合で教員に質問する時間を確保するのが

困難だったり、研究室に訪問しにくい学生の立場ならではの様々な事情があることを教員は配慮しなければならない。

IV 結びにかえて

以上、英語の授業運営、授業時間外の学習および学生への配慮やサポートについて述べてきたが、英語力を身に着けるための効果的な手法と取りつつも、学生の英語学習意欲を掻き立てる授業運営を心がけることが肝心であろう。幸運にして本学学生は英語の必要性を感じているようなので、教員側としては学生が継続して学習を進めていくことができる環境を整え、現状に甘んじることなく、改善を心がけていかなければならない。学生は専門知識の取得、実習、そして国家試験突破して看護師となるべく日々鍛錬しているのだから、教員も学生の成長と可能性を信じて授業運営に試行錯誤していかなければならない。

英語は積み重ねの学習と言われていることがあり、初級段階でついていけなくなればその後の習得が難しくなり、苦手科目となってしまう。とりわけ英語が要求されない大学入学試験では、入学前に英語学習に挫折し、苦手意識を抱えたまま入学する学生が多い。英語に対する苦手意識がいかなるものであっても、これからのグローバル社会に備え、看護関連だけでなくどの分野に進んでも英語に直面しなければならない。インターネット上の情報の大半は英語で書かれている事実を踏まえると、時代の潮流についていくためには英語からは逃げ切ることができず、英語に向き合う必要があることを本学学生も理解しているようだ。

本学で英語の授業をするにあたり、英語を教える技術力だけでなく、学生の心理的なサポートする力も教員には必要であると感じる。入学前に英語で挫折感や苦手意識を抱え、英語力に自信のない学生でも一生懸命に取り組む姿勢があれば褒めるようにする。少しずつ英文を読み進め、プリントの枚数をこなすことで着実に学習が進んでいることを実感できるように促し、学生が取り組む1つ1つのことに意義がある、英語力向上につながるのだと勇気づける。中学・高校時代に文法理解が曖昧だったが、大学入学後の授業で確実に理解できたという学生もいれば、難読単語をアクセントを含めて正確に発音、理解できた学生もいる。

そういう時は大学入学までの英語学習は無駄ではなかった、潜在的であっても英語学習にしっかり取り組んでいた成果であると学生の努力を認めることが大切だ。苦手なものに対してでも正面から向き合うことのできる姿勢を学生は持っているのだ。

看護学を学ぶ大学生は、卒業単位を取得することができても、看護師国家試験という試練が待ち受けているのだから、彼らのプレッシャーは測りしえない。そのような心境においても自ら選んだ看護の道を陰しくも日々鍛錬し、着実に歩いていくことが学生には要求される。この点は英語学習も同じで、英語力をつけるためには日頃の積み重ねが肝心である。ただ、幸運にして向き不向きや学習者の適性や才能に関係なく、英語は確実に習得でき、医療と違って人命に関わることはない。また、英語関連の教材は多量に出版されており、インターネットを活用すればすぐに入手することができるという手軽さがある。世界を席卷したコロナ禍において、海外事情に必然的に目を向けることになっていることから、グローバル化が今まで以上に急速に進み、英語の必要性が一層強くなることだろう。

大学における英語の授業の目的は、英語学習そのもののだけにとどまらない。授業で英語学習方法を教えることはできるが、英語は日々の積み重ねが肝心なので、英語力をつけるにはある程度の期間の訓練が必要であり、大学のカリキュラムで設定されている授業時間数で、単位さえとれば外国人の患者相手に即座に対応できるとは言えない。グローバル化が進むことで、近年医療業界においても日本で就労する外国人看護師や外国籍の患者も増加傾向にあり、コミュニケーションの手段として英語の必要に迫られる。そのような時勢において、本学における英語の単位取得者は英語の必要性も学習方法も体得できているので、英語学習を継続する才覚はあるだろう。そうであれば、海外論文からエビデンスを見出すなど今後の医療を担う看護専門職として将来活躍するための基礎的な能力を習得すべく、大学において英語の授業が設けられていると考えることができるのではないだろうか。さらに、大学での英語の授業の役割は英語そのものだけではない。通常、大学生はこれまでの人生よりも卒業後の人生のほうが長い。看護

師の職務を全うするには、日頃からの自己研鑽が求められる。授業で英語に取り組む上で、文章構造を把握して英文内容を正しくとらえて英文を読み進める努力を重ね、プリント学習に取り組むことで少しずつ達成感を覚えていくということは、卒業後に自ら選んだ看護の道を主体性をもって着実に歩いていく意欲にもつながる。英語担当の本稿筆者としても、学生の将来を見据えて英語教育に取り組んでいく所存である。

V 利益相反

本稿において開示すべき利益相反 (COI) はない。

文献

Sasajima Shigeru, Yamazaki, Asako. (2017). *Take Care! Communicative English for Nursing and Healthcare 3rd edition*, Tokyo: Sanshusha.